

今月のテーマ

『テミスの不確かな法廷』が教えてくれる、仕事の本質

映画好きの私が最近、「おもしろいですよ！」と勧められてひさしぶりに見たドラマです。たしかにとってもおもしろく考えさせられたドラマでした。

今月はこのドラマを組織改革の視点でお伝えしたいと思います。（内容自体のネタバレなしです。）

どんなドラマ？

前橋地方裁判所を舞台にした物語で主人公の安堂清春は、少し風変わりな不器用な裁判官です。ASD（自閉スペクトラム症）とADHD（注意欠如多動症）の特性を持っています。「暗黙の了解」を察するのが苦手な分、常に「自分は何かを見落としているかもしれない」という強い警戒心を持っています。またこんな自分が裁判官という立場でいていいのかという悩みから周りにも特性を伝えられずにいます。

そんな主人公が強固なルールとヒエラルキーで縛られた裁判所という組織の中で、どうやって周囲と関わり、変化を起こしていくのか。そんなドラマです。個人的には毎回、涙、涙でした。

「分かっていない」と認める勇気が、チームの暴走を止める

仕事に慣れてくると、つい「自分のやり方は正しい」「状況は全部把握できている」と思い込んでしまいませんか？

「分からないことを分かっていないと、分からないことは分かりません」

という彼の価値観は秀逸で、自分の価値観にも影響した大好きなセリフです。

たしかになにかを理解しようとするとき分からないことを認めてまずは分かろうとしないと答えは微妙にずれてしまいます。当たり前かもしれませんがどんな仕事でも行う上での本質だと気付かされます。

経験を積むほど忘れがちな「無知の知」。小さな違和感をスルーせず、「本当にそうかな？」とゼロベースで疑える人がいるだけで、組織の思い込みによる失敗を未然に防ぐことができます。

「異質な視点」が組織の死角を照らし出す

会社やチームというものは、効率を求めるあまり、どうしても「同じような考え方をする人（均質性）」を集めたがります。「暗黙の了解」で話が通じるチームは一見まとまりが良いですが、実は全員が同じ方向を見ているため、背後にある大きな「死角」に誰も気づけないという弱点を持っています。

安堂裁判官のように、組織のルールやマニュアルの枠に収まりきれないアプローチをする存在は、時に「異端」として扱われがちです。しかし、予定調和を崩し、これまでになかった視点を持ち込んでくれる存在こそが、複雑な課題を解き明かす鍵になります。同質性の高い組織の中で、「少し違う角度から物事を見る力」がいかに重要か。多様性という言葉が一人歩きして、変な方向に進んでいるように感じるのですが、本当の意味を、このドラマは教えてくれたように思いました。

まずは**無料**セミナー等から試してみませんか。下記QRコードの特典付きアンケートよりご連絡ください

組織の成長フェーズに合わせた、実効性のある人事制度構築をご支援します。



採用、定着、育成等組織について
お悩みの企業の皆さま



社会保険労務士法人ウィズロム

恐れずに「良いケンカ」をしよう

職場での意見の対立は、できれば避けたいのが本音だと思います。でも、このドラマを見ていると「摩擦を恐れてはいけない」と痛感させられます。

劇中では、客観的な証拠や論理を重んじ、感情を排除しようとするエリート判事補と、現場の感覚や違和感を信じて泥臭く事実を追う安堂裁判官が、仕事の進め方をめぐって何度も真っ向からぶつかります。

しかしこれは、単なる人間関係のモメ事（感情の対立）ではなく、「目の前の課題をどう解決するか」という目的のための前向きな対立（タスクの対立）です。波風を立てないように表面的な仲の良さを優先して妥協するより、お互いの見方を全力でぶつけ合い、時に悩みながらより良い答えを探していく。そんな「創造的な対立」のプロセスが、結果的に個人もチームも強く育てていくのだと気づかされます。

挑戦と摩擦を支える「安全基地」の存在

今回、組織論の観点で一番注目したいのが、安堂裁判官が孤軍奮闘しているわけではないという点です。彼が独自の視点で突き進める背景には、上司である門倉部長の存在があります。門倉部長は、ルールから外れがちな安堂を頭ごなしに否定せず、ある種の「防波堤」となって彼を守り、持ち味を生かせる環境を作っています。個人的には、この門倉部長自身が組織の常識を意識しつつ、自分が大切にしている仕事への情熱を解放する場面が好きでした。

どんなに優秀でユニークな視点を持つ人材がいても、本人の努力だけでは硬直化した組織の中で生き残ることはできません。周囲の人間がどう彼らを受け入れ、失敗や摩擦を許容する「安全基地」を作れるか。飛び抜けた才能を生かすも殺すも、周りのマネジメントや組織の器の大きさ次第なのだと、深く考えさせられる描写だと思います。

組織の「前例」より、目の前の「事実」に誠実であること

歴史が長く大きな組織になればなるほど、「前例がない」「間違いを認めたくない」といった、組織自身を防衛する理屈が優先されがちです。しかし、どんなにシステムがガチガチでも、結局それを動かしているのは生身の人間です。

「今までこうだったから」「組織のメンツが潰れるから」という思考停止に陥らず、自分の頭で考え、目の前の事実に対して徹底的に誠実に向き合い続けること。それこそが、本物のプロフェッショナルの姿なのだと思います。『テミスの不確かな法廷』は、白黒ハッキリした分かりやすい答えをポンと出してくれるドラマではありません。でもだからこそ、「正解がない中で、どう周りに関わり、どう仕事に向き合っていくのか」という、私たちが日々直面しているリアルな問いへのヒントが詰まっているように思います。

最後に一言

最終回、ある裁判の法廷で安堂裁判官が5分程度語る場面があります。見ながら一人で号泣していました。誰も完璧ではないし、もちろん自分もそうです。ただ、振り返るとまだまだ反省して、後悔して、自分を責めたり、相手を責めたり、その繰り返しです。未熟ながら法律を扱う仕事をしている身ですので余計に響くものがありました。

この作品は配信サービス等でも配信されていますのでぜひ、鑑賞してみてください！あと、主演の松山ケンイチ氏の演技は秀逸でした。

(文責：特定社会保険労務士・組織心理士/岡本芳幸)

